

水害状況を確認できる「ビューちゃんねる」を手がけ、 地域のスマートシティ事業の発展に取り組むシステム開発会社

企業や自治体のシステム開発・インフラ構築を手がけるアーベルソフトは、一昨年、ほぼリアルタイムで水害状況を確認できる地域情報写真配信サービス「ビューちゃんねる」を開発した。さらに同社は、自治体が進めるスマートシティ事業に向けた基盤ソフトウェア“FIWARE(ファイウェア)”の基盤構築も数多く手がけている。今、そうした同社の製品や開発実績に自治体から熱い視線が注がれている。



代表取締役 西岡 和也氏

- 代 表 者 代表取締役 西岡 和也
- 設 立 昭和59年8月
- 資 本 金 5,000万円
- 従業員数 57名
- 事業内容 システムコンサルティング、システム開発、システム環境の構築、システム導入、システム運用支援、システムインテグレーション事業
- 所 在 地 〒350-0229 埼玉県坂戸市薬師町10-2
TEL 049-284-5748 FAX 049-284-5548
- U R L <https://www.abelsoft.co.jp>

坂戸市に本社を置くIT企業、株式会社アーベルソフトは、顧客の要望に応じたシステムを開発する「システム開発事業」と、システムが稼働するために必要となるサーバー、ストレージ、ネットワーク等のインフラの設計・実装を行う「インテグレーション事業」を事業の柱とする。これまでに、在庫管理システムや営業の予実管理システムの開発、官庁向けファイルサーバー導入に向けた環境構築、情報を管理するバックアップシステムの構築等、幅広い業界のシステム開発を多数手がけてきた。

「当社では年間数十件ほどのシステム開発を手がけています。仕事は、継続的なお客さまや大手SIerエスアイヤー（システムインテグレーター）さまから依頼があります。納品後はサポートも行いますので、システム開発から運用サポートまで一貫して行っています」（西岡和也社長）

近年では、自治体が抱える課題解決に向けたソリューションの提供も行っている同社。スマートシティ（デジタル技術を用いて地域課題を解決する）の実現に向けたシステムの開発やインフラ構築にも力を注いでいる。

→ エンドユーザーの満足度向上に注力

同社の設立は昭和59（1984）年。西岡社長の義兄が、大手総合ITベンダーのエンジニアを辞めて起業した。その2年後、西岡社長が同社に入社する。

当時パソコンは8ビットから16ビットへと移行するタイミング。IT業界は活気に満ち、ベンチャー企業も多く誕生していた。同社は縁あって、中でも有力なIT総合企業と親しくなり、そこでさまざまなチャンスをものにしていく。

「その企業は営業力の大きい会社で、多くの会社からビジネスの話が持ち込まれていました。そうした開発の依頼を当社に紹介してくださるんです。そこで一部上場の製造会社や、大手電機通信会社のシステム開発を手がける機会を得ました」

同社は創業時からオープン系OSのシステム開発をメインに行っていた。システムの開発からインフラ構築、実装、試験、納品、運用保守まで一連の工程を自社で行うため、エンドユーザーに向けてきめ細やかなサービスを提供できるのが強みであり、顧客からも高評価を得ていた。

「企業さまからの依頼とSIerさまからの依頼は半々です。SIerさまからの仕事でも、エンドユーザーに納品した後で保守サポートを移管されることが多いので、どんな仕事でもエンドユーザーの顧客満足度を上げることをモットーとして行っています」

そして平成22(2010)年、西岡社長が2代目に就任する。平成28年には本社ビルを建設、令和元(2019)年社員寮を兼ねた第2ビルを取得、令和2年札幌支社開設と、順調に事業を成長させていった。

➔「ビューちゃんねる」開発の道のり

令和2年、同社は、スマートシティ事業を進めていた毛呂山町から「IoTを使って町民のために何かできないか」と相談を受けた。そこで西岡社長は、「電柱にカメラを付けて、災害時に河川や道路の状況を見られるとよいのでは」と提案する。

その発案は令和元年の台風19号で水害被害がもたらされた際、「テレビを見ても被害の様子はテロップで伝えられるだけで、近隣がどうなっているかわからず不安だった」という西岡社長自身の体験によるものだった。毛呂山町でも消防団が災害状況を確認できず、身動きが取れない状態だったという。早速、同社と毛呂山町、電力会社、ケーブルテレビ会社でタッグを組み、プロジェクトが動き出した。

町内の河川やアンダーパス等がある場所(現在11カ所)の電柱にカメラを設置し、3分ごとに定点撮影を行って画像データを取得。それをサーバーに送信して保存。そこからネットおよびケーブルテレビ会社へと配信するシステムを構築した。こうして令和2年、自治体や地域の人々がほぼリアルタイムで河川の越水や道路の冠水状況をスマートフォン、パソコン、ケーブルテレビで確認することができる地域情報写真配信サービス「ビューちゃんねる」が誕生する。

「毛呂山町は住民サービスとして提供しているので、プライバシー保護の観点からAI機能を使い車や人にマスキング加工を施しています。自治体の方だ

けが見られるように開発するケースもあります。将来はデータを集め、ビッグデータとして解析や研究などにも展開させることができると考えています」

自治体からは「少ないマンパワーで状況が把握できる」「町の人から安心感を得られている」と、高い評価を得ている。現在、ビューちゃんねるは毛呂山町のほか朝霞市、志木市にも導入され稼働しており、その他複数の自治体でも導入が検討されている。



➔IoT技術を駆使した商品を開発

長引くコロナ禍、同社はIoTセンサー企業と提携して「3Cs monitor(スリーシーズモニター)」を開発した。これは施設や店舗にライブカメラやセンサーを設置して混雑状況やCO₂濃度等で3密の状況を監視、パソコンやスマートフォンで確認できるというものだ。指定した人数を超えたり換気の基準値を超えたりした際は、AIによって警告も表示する。

施設の来場者に安全・安心をアピールできるほか、クラスター発生の予防も期待できる。さらに、施設管理者が状況を一元管理できることで現場担当者の負担も軽減される。これまでに飲食店やクリニック、投票所やワクチン接種会場で用いられるなど、多く

の施設で導入されている。

「近年、通信インフラが発展してIoTが実現しやすくなっていますが、IT業界では数十年前から“ユビキタス”という言葉で、いろいろなものをネットにつなげようというIoTの先駆けとなる取り組みを行ってきました。当社も以前から、工場にセンサーを設置して異常があれば通知するシステムの開発などを手がけてきました」



「ビューちゃんねる」のカメラ

社内の様子

「3Cs monitor」のライブカメラ (左)、室内の状況 (右)

現在、同社は長年の経験や知見を用いて、自治体が推進するスマートシティの実現に向けたシステム開発に注力している。スマートシティ事業の基盤ソフトウェア(都市OS)の一つFIWAREのインフラ構築とアプリケーションの開発である。

➔ FIWAREの実績を積む

「デジタル庁が掲げている“デジタル田園都市国家構想(ITで社会を変革して地域をつなぐ取り組み)”には、共通するデータ連携基盤が必要になります。今後FIWAREがそのデファクトスタンダードになっていくと思います」

これまでスマートシティ実現の壁となっていたのは、

組織が各々のシステムで集めたデータをどうやって共有して活用するか、という問題。それを解決する都市OSの一つFIWAREは、分野や組織を横断したデータ流通が可能なデータ管理基盤だ。同社は数年前から毛呂山町や他の自治体でFIWAREを使った自治体の基盤構築を手がけ、アプリの開発も行ってきた。また、バックアップやセキュリティシステムをはじめとした機能を提供したり、システムの保守・運用を請け負うことができるのも強みだ。

FIWAREを手がけるシステム開発会社はまだ少なく、スマートシティ事業の基盤ソフトウェアがこれに絞られれば、同社にとって大きな商機になるだろう。

➔ 社員の働きやすさを考えた取り組み

SE(システムエンジニア)不足が叫ばれる中、同社の採用は順調だという。新入社員の教育は、文系の場合はプログラムをつくる基礎から教えていき、ベテランの下で時間をかけてシステム開発の技術を修得しながら、SEとして独り立ちさせていく。

社員のワークライフバランスの推進にも力を入れており、家庭と仕事を両立できるようコロナ禍以前からリモートワークを推進。また、男女問わず社員が積極的に育休を取得している実績もある。現在はコロナ禍で見送っているが社内イベントも活発で、社内には臆せず意見を発言できる風通しのよさがあるという。定着率がいいというのもうなずける。

「今後はFIWAREに注力しつつ、ドローンを使った事業展開も探っていく考えです。社会インフラの点検等でデータを収集することで、事業の幅が広がるのでは、と思っています」

現在、3代目を継ぐ西岡社長の子息がFIWAREのプロジェクトを進めており、事業承継の道筋もしっかり整えられている。同社は今後も企業のシステム開発、システムインテグレーションという事業の柱を磨きながら、スマートシティ事業の発展に向けた開発に力を注ぎ、さらなる成長を続けていく。